

巻 頭 言

ご承知のように、「滋賀医科大学看護学ジャーナル」は電子化され、開学 10 周年記念特別号を含めたバックナンバー1~3 巻がすでに昨年末までに大学ホームページに掲載されました。この動きは、医学科が滋賀医大雑誌の電子ジャーナル版を発刊したのに呼応して生じたもので、看護学科も研究に関わる活動状況を情報公開するべく、企画調整室の支援を受けていち早く実現できたのです。

研究情報の発信手段はこの 10 年間で急激に変化しており、小規模の発信源であればあるほど電子版の利用が今や時代の趨勢になっているといえましょう。とはいえ、看護学科内には、紀要は冊子体で発刊して欲しいとの要望が強く、本年度は電子版と冊子体の二本立てで発刊することになりました。将来的には二本立てを継続できる見通しは定かではありませんが、学科内の総意が揺ぎないものであれば、その必要性を主張し続け、大学内外の期待に応えた「看護学ジャーナル」にする努力を払わねばなりません。

今回、研究内容や研究成果についても外部評価により認めてもらえるレベルを維持するため、投稿規定の見直しを致しました。巻末に掲載していますように、本誌発行の目的を明確にして、その目的に沿った論文であるか否かをきちんと査読し、掲載を決定するシステムを作り上げたのです。教員相互の論文査読を公平な視点で実施するために、「査読ガイドライン」を作成して、編集委員会が複数の査読者を選出させて頂きました。査読者には「査読報告書」の提出を依頼し、査読が有効に機能しているかを編集委員会チェックする態勢を整えました。

こうしたシステムを作ることにより、馴れ合いによる安易な論文投稿は許されなくなり、査読者達のアドバイスをすることで経験の浅い若手研究者でも論文の推敲を重ねることが可能になると考えました。一見面倒に見えるこの共同作業は、投稿者だけでなく査読者にとっても確かな視座を磨く機会になり、研究活動の活性化が期待できます。

若手研究者の投稿論文を積極的に採択する看護系専門雑誌が少ない現状では、研究発表の場を提供し、若手を育てる責任は当該の教育研究機関にあるといえましょう。紀要への係わりは、研究者としての研鑽を積む機会となり、社会へ研究成果を発信する責任を自覚することにもなります。論文原稿の査読は編集委員会が期待した以上に厳正な目で行われ、教員間の馴れ合いを排除する上で効果的であったと自負しています。これからも研究活動の質の向上と改善に努め、学外からも高く評価される情報発信源となるように看護学科の教員全員が力を合わせて頑張りましょう。

ともあれ、平成 17 年度の紀要「滋賀医科大学看護学ジャーナル」4 巻 1 号の編集を無事終了できたことを皆様へ感謝し、裏方の大事な仕事をしっかりと引き受けて下さった 5 名の編集委員と静かに喜びを分かち合いたいと思います。

平成 18 年 2 月

滋賀医科大学看護学ジャーナル
編集委員長 今本喜久子